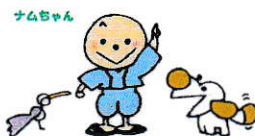


# 秋のお彼岸について

秋きぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞ驚かれぬる

—藤原敏行—



いまだ残暑が厳しく、秋が来たと目には鮮やかに見えないけれど、これまでとは違う風の音には驚かされる。もう秋が来たと感じずにはいられないと言う気持ち、四季を大事にしてほんの僅かな変化も敏感に捉えることができる日本人の感性に溢れています。

昔から『暑さ寒さも彼岸まで』と申しますが、春分と秋分の日、一日の昼と夜の長さがほぼ同じです。しかも、太陽は真東から上り真西に沈みます。こうした右にも左にも偏らない自然現象をお釈迦さまの説かれた教えと重ね合わせ

「中道」の思想のお彼岸という仏教行事になったようです。考えてみれば好き嫌い、善悪や明暗などというように対極するものの中でバランスをとっています。対立するどちらにも偏らず、どちらも見ながらどちらも生かしていく歩みを「中道」といいます。



お彼岸とは「パーラミター」という古代インド語を漢訳したものです。摩訶般若波羅蜜多心經の波羅蜜多(はらみた)のことであって「到彼岸」と訳します。

仏教では、いろいろな欲望や迷い悩み多いこの現実世界を「此岸」(しがん)といい、苦しみのない理想世界を「彼岸」(ひがん)と教えます。迷いの此の岸を去って悟りの彼岸に渡り達するという意味になります。

彼岸に渡る方法として、次の6つを六波羅蜜と言います。

布施…思いやりのある暖かい心で人のため、社会のために尽くすこと。

持戒…私たちが生活する以上、どんな場合でもルールがあります。

定められたルールを正しく守り自分を磨いていくこと。

忍辱…苦難の伴わぬ社会はありません。

すべての苦難に耐え抜き、乗り越えていくこと。

精進…成さねばならぬ事は、精一杯の力で努力をすること。

禅定…落ち着いた静かな心で行動すること。

智慧…これらの五つの波羅蜜を実行し中道を歩み、成就させることを言います。

布施とは、施しに対して結果を求めないことです。世間には「私は施したくても施すものがありません、世話をしたくてもそれだけの力がありません」と言う方もおられますが、笑顔で接したり、手を貸したり席を譲るといったようなことも立派な布施行の実践です。

持戒とは、教えにつつまれて生きることです。一般的には戒は「制止」と解釈しがちですが、正しく生活するための規範です。禅寺では玄関に「脚下照顧」の文字をよく見受けまます。履き物を揃えるという意味もありますが、自己の足元を見るということは「持戒」にほかなりません。

裏面に続く

忍辱とは、辱めを堪え忍ぶという字義ですが、辱めを自我の堪忍袋に入れるのではなく、「空性」なる無我の堪忍袋に入れて忍辱によって心を浄めることです。いわゆるこの忍辱は我慢とは違います。忍辱とは、単に耐え忍ぶということではなく、ののしりや辱めを受けても相手に悪意や怨みをいだかないでよく耐え忍ぶ道であり行です。

精進は、道元禅師は精進を「諸々の善法において勤修すること無間なるを精進」であると示されます。ただ頑張るとするのは努力にはなりますが精進にはなりません。

精進の本来の意味は「正しいことに向かって怠ることなく努力すること」です。何に努めるのか、その努力の方向が誤っていたら、頑張るほど道からずれてしまうことは申すまでもありません。

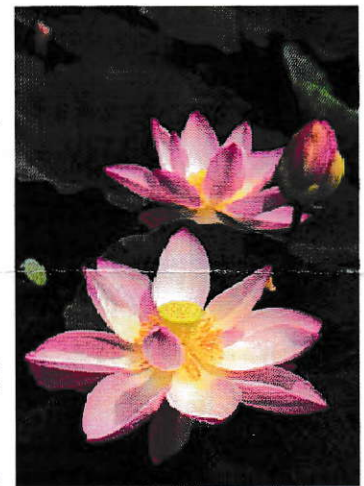


禅定とは、思いを静め心を明らかにして真正の理を悟ることです。日々のあわただしい中であっても、心が静かになると本来の感性がよみがえり、今まで聞こえなかった鳥の声や風の音が聞こえてきます。今まで見えなかった諸法もしっかり見えてきます。

智慧とは、仏の深い洞察力です。『正法眼蔵（現成公案）』では「仏道を習うというのは自己を習うなり、自己を習うというのは自己を忘るるなり・・・」と示されています。自分の人生は自分で責任を持ち、自分で豊かにするしかありません。教えを説かれ護り伝えられた仏菩薩を恭敬することは当然ではありますが、自分を認め、自分を励まし、自分を高め、仏性を開花させるということは他ならぬこの「自分」ということです。

以上簡単ですが、六波羅蜜について申し述べました。

国民の祝日に関する法律の中に、春分の日は「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」、秋分の日は「祖先を敬い亡くなった人々を偲ぶ日」と定められています。そして、現在の日本では春分の日も秋分の日も共にお彼岸の中日として、国民の間に定着し、宗派を超えてお墓参りに行くことが一般的な風習となっています。



お彼岸にはお墓参りをしますが、その時にかかせないのが、水、塗香、花、線香、飲食、灯明などを供えることは六波羅蜜を実践することになるというお示しもあります。

即ち水はすべての生育の基となるもので「布施」。塗香は悪臭を除き身心を爽快にするということで「持戒」。花は人の心をやわらげ、怒りを鎮めるのは「忍辱」。線香は火のともっている間は芳香を漂わせるので「精進」。飲食はオハギのような供物を食すと気分が落ち着くので「禅定」。灯明は「自灯明・法灯明」の教示のように暗夜の荒海の中の灯台の如く安心をもたらす確固なる拠り所たる「智慧」と言えます。

お彼岸は、ご先祖さまがおいでになってこそその自分の存在に思いをはせ、今生きているこの命に感謝をするという仏教徒にとっての大切な行事だといえます。